
蛙呪

金田カエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛙呪

【Zマーク】

Z5058C

【作者名】

金田カエル

【あらすじ】

朝起きると声を失っていた。それはカエルの呪いに起因するものだと思いつく僕。

遮光カーテンの隙間から漏れ出る柔らかな光。

僕はベッドの上で伸びをし、言葉のよつた音を発しようとした。しかし、口から出てきたのはささやかな呼吸音だけだった。

僕は首をかしげ、自分の名前を呼んでみる。だけど、頭の中で具現化された言葉が空気を振動させることはなかつた。

カエルの呪いだと思った。

遡ること、昨日の夜。

帰宅した僕は、ベッドの上に緑色の小さなカエルを発見した。典型的なカエルだ。

僕はこの時も首をかしげてしまった。

この部屋はマンションの13階にあり、カエルはあるかアリすらも侵入したことがない。

しかし、僕は仕事終わりでクタクタであり、その事実について深く考える気にはなれなかつた。

大切なことはカエルをどうするかだと思った。

その時の僕は疲れすぎていて、また一階まで行ってカエルを逃がしていく気にはなれなかつた。

でも、カエルをどうにかしないと落ち着かない。

僕はとりあえずランダにカエルを放置しようとも考えた。

しかし、明日になれば夏の暴力的な日差しがベランダに降り注ぎ、カエルが焼かれていくイメージが浮かんだ。

それは、あまりにも残酷なように思えた。

僕は寝室からリビングへ、リビングから寝室へとウロウロ歩き回った。

僕は悩みがあると、いつもウロウロしてしまひ。リビングから玄関へ続く通路をウロウロしていく時に、トイレが目に入った。

トイレに流せば直接殺すことにはならないし、もしかしたら下水道に出て生き延びるかもしれないと思つた。

僕はすぐにベッドに向かつた。

そこには、先ほどと同じ態勢のカエルがいた。四つん這いになつて、目をギョロつかせている。特に珍しいところもない、普通のカエルだ。

僕はそつと右手の親指と人差し指でカエルをつまみ、トイレに連れて行つた。

ネクタイが便器に入らないうに気をつけながら、僕はしゃがみこんだ。

「もう来るなよ」と言い、カエルを水の中に落とした。そして、僕はカエルを見ないようにして水を流したのだ。

その結果、僕は声を失つた。

カエルは死んだのかもしれないなと思つた。

そして、僕に呪いをかけたのだ。

「僕は精いっぱいの配慮をしたつもりだよ」と心の中で呟いた。

失ったものは戻らない。

力エルの命も僕の声も。

僕はため息をつき、力エルがどのように死んだのか想像してみた。
また、これから声のない僕の生活についても想像してみた。

50／50という言葉が心に浮かび、すぐにはじけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5058c/>

蛙呪

2010年11月27日07時42分発行